西小倉水没の対策を

宇治・防災を考える市民の会 防災の集いに40人

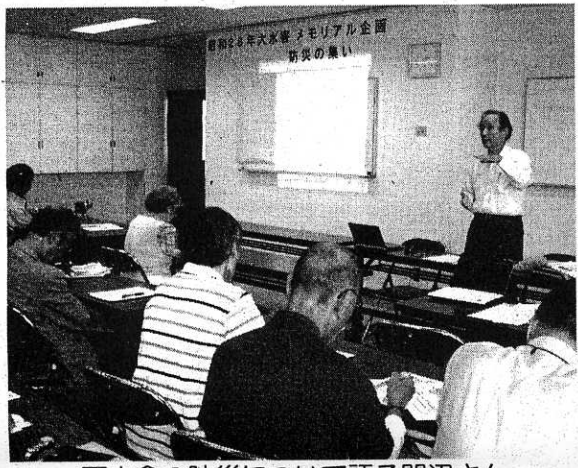
『宇治防災を考える市民の会』(志岐常正代表)は25日、西小倉コミセンで28災メモリアル企画「防災の集い」を開き、約40人が宇治市域で最も低地にある西小倉地域の防災について考えた。

1953(昭和28)年9月の豪雨で宇治川堤防が決壊、巨椋池を干拓した西小倉地域が水没してから57年が経過したことを契機に企画。志岐代表は「西小倉は水害が一番起きる可能性がある。干拓田で地盤も緩く、地震でよく揺れる地域でもある。この地域の防災を皆さん自身がどう考えるか。情報共有を図りたい」と挨拶した。

近年、地球温暖化の影響と思われるゲリラ豪雨が頻発しており、市域でもここ数年、床上・床下浸水が続発。西小倉地域に居住する宮本繁夫氏(元市議)が水没状況について映像を使って説明し、仮に宇治川堤防が決壊した場合、最大5・9㍍も水没し、その位置を電柱に記していることを紹介した。

巨椋池干拓田の防災について報告した国土問題研究会の開沼淳一理事は「宇治川堤防は巨椋池に流れ込む水流があったところを横断して設置しており、堤防の下を水が浸透する危険性がある。また、内水対策としては開発を抑制するほか、公共用地に水を溜めたり、浸透マスを設置する。各戸で雨ドイの水を溜めている地域もあり、みんなで取り組むことが大事。対策として、何が適当か、やることがそんなにたくさんあるわけではない」と全員参加の対策を促した。

このあと、宇治市の濱岡洋史危機管理課長が『昭和28年大水害の教訓と市の防災対策の現状』と題して講演した。



西小倉の防災について語る開沼さん